

日曾利の天竜川と画家

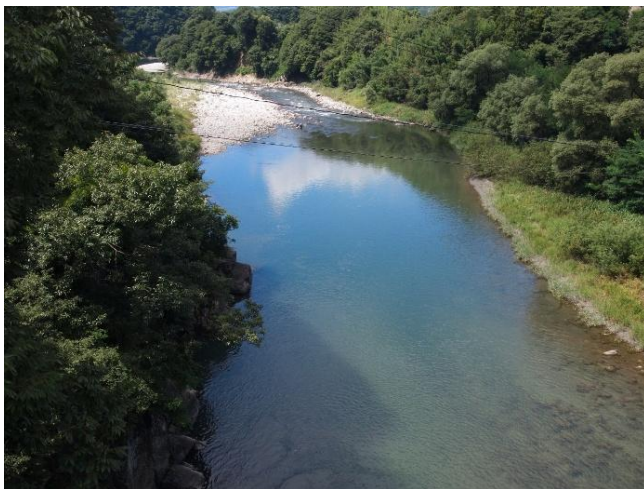
伊那谷は山が険しく天竜川も急流だったので、昔の物資運搬は、陸上のみならず川を利用した運搬も大変なことだった。そこで活躍したのは通船と渡船であった。日曾利には渡船場・船渡があり船宿もあった。江戸時代から明治時代にかけて、多くの人々が船を利用して香坂家を訪問していたようである。

安藤碧鳳(江戸後期～明治)は、広島出身の旅の絵師で伊那谷を放浪した。南画な南画風の絵を描いていたと云われている。香坂家本家のお抱え絵師として活動していたようである。香坂家本家の墓地に眠っている。

香坂家分家は、屋号を問屋と云い、通船や渡船の荷物を扱った問屋と見られている。付近の鳥居原には上村豊太郎の通船問屋があったことが知られているので、香坂家分家は、ここで問屋の業務を代行するような形であったと推定されている。菱田春草(明治7～44年)が、この船宿に立ち寄ったそうである。

長野県飯田市美術博物館に、春草が水墨で扇面に滝を描いた「瀧図」が寄託されている。これは、明治34年(1901)に飯田に帰省した際、天竜川を下り日曾利の香坂家分家の船宿で描いた作品と云われている。多分、船宿の人に置いていったのであろう。春草は、横山大観と東京美術学校の同期生。春草と交友のあった歌人・日本画家の桃澤茂春(本名・重治、画名・如水)は、飯島町本郷の出である。

(川端紅葉著 2026・3・20)



「日曾利の天竜川」 ©2017.8 川端紅葉